
二人の天使

N澤巧 T 郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の天使

【Nコード】

N5376A

【作者名】

N澤巧T郎

【あらすじ】

今日はボクにとって特別な日。ボクが生まれた日なんだ。だけど、特別な理由がもう一つあって、それは……。

今日、僕は10歳の誕生日を迎えた。

学校の友達を呼んでプレゼント交換して、おいしいケーキをおなか一杯食べた。

楽しい楽しい一日だった。

パーティーもおしまい。

家の前でみんなを見送る。

「今日は楽しかったよ」

「また来年もしようね」

僕は何も答えずに笑っていた。

「ばいばーい」

ボタン

自分の部屋に入り

ガチャ

鍵を閉める。

「終わったよ」

ベッドの上で寝ていた彼が起き上がる。

「時間通り。あと5分だ」

「当たり前だつて。君が現れてから嫌でも時間を気にするようになったからね」

そう言いながら彼の隣に座る。

「どうだ？楽しかったか？」

「そりゃあもう。あまりに楽しすぎて時を忘れそうになったよ」

「そりゃ良かった」

ずいぶん嬉しそうに答えた彼は続けて言った。

「さて、今まで長かった？それとも短かった？」

「キミは難しい質問をするね。そうだね。やっぱり長かったかなあ。でも……」

「アッハッハッハッ。やっぱり短いと思ってるんだ」

「ち、違うよ。そういうわけじゃなくて」

すると彼は顔を近づけて真顔で言った。

「それと、俺を恨んでるんだろ？」

僕は少し驚いて言葉が出なかった。

「ま、恨まないほうがおかしいか」

「違うよ。恨んでなんかないよ」

「じゃあなんだよ。どう思ってたんだよ」

僕は顔をポリポリ指で掻きながら答えた。

「……むしろ、感謝してる」

「ハアッ!？」

びつくりした表情の彼は表情をそのまんまで言う。

「おまえ自分で何言ってるかわかってんのか!？」

「わかってるよ。だってさ……だって君は、僕の初めて出来た……友達だから」

「と、友達!？」

さつきよりびつくりした表情の彼は表情をそのまんまで続けて言った。

「オマエな、友達の意味知ってんのか？俺のどこが友達なんだよ」

僕はちよつと照れながら本心を言った。

「だってさ、君は僕にいろんな事を教えてくれたし。いじめられてたときも助けてくれたから」

すると彼もなんだか照れくさそうにいいわけを言った。

「あれは、お前がいつまでもうじうじしてるから。それに、俺はおまえとしか話せないんだから。お前が泣いてちゃしゃべれなくて暇だからな」

「あはは。そんな照れなくていいのに」

「なつ、俺は別に照れなんか、ねえよ」

「アハハハ」

「な、お、お前が、変なこというから……」

僕は笑いながら時計を見た。秒針があと一周すると長い針が頂点を指す。

彼も見えていたらしく、隣で音もなくすつと立ち上がって、僕の前に立った。

「……あと、一分だ」

「わかってる……」

僕はうつすら笑いながら言って、眼をつむった。

彼との出会いを思い出した。

そして、今に至るまでを。

目を開ける。

そこには出会ったときの姿で彼が立っていた。

大きな力マを持った彼が。

初めて会ったときよりカマが小さく見える。

そうか、彼と僕が大きくなったんだ。

彼がカマを構える。

「…………ごめんな」

彼が聞こえるか聞こえないくらい小さな声でささやいた。

あと5秒

「…………今まで」

カチ

「ありがとう」

カチ

僕は満面の笑みで微笑んだ。

カチ

僕の目から涙が一つ零れ落ちた。

カチ

ブンッ！！

カチ

カチ

カチ

カチ

涙でぐしゃぐしゃになった彼が立っている。

僕も負けないくらいぐしゃぐしゃになって泣いている。

「……出来ない……」

カマを僕の首から離れた。

「……俺にとっても……お前は………友達だ」

ヒックッ

ヒックッ

「……でも……君が……」

「いいんだ……」

「……でも」

「いいんだ!」

その時初めて、僕は彼の本心を聞くことが出来たと思う。

「なんで……なんでお前なんだよ！！……もつといるだろう！！死んでいいやつなんてさあ……。こんなの……こんなのおかしいだろ！！」

秒針の音が、僕が生きていることを証明した。

二人のすすり泣く声が秒針の代わりに時を刻む。

彼が窓の前に立って窓を開けた。

冷たい風が濡れた頬を冷ましていく。

「じゃあな……」

「ま……待つてよ！！」

「……俺は……悪魔失格だ」

「待つてよお！！」

夜風に揺れるカーテンがバタバタと音を鳴らしていた。

「……君は……どうなるんだよ……」

その時、窓から大きな黒い影が侵入した。

その影は、やさしい口調で僕に言った。

「安心しなさい。彼はどうにもならない。だから泣くのはやめなさい」

僕は泣くのをやめて聞いた。

「……どういふこと……？」

「悪魔って言うのは人の命を奪うのが仕事だ。だから、命の重さを知らなくてはいけないんだよ。彼は命の重さを充分に実感した。彼は、合格だ」

僕はなんだかとても嬉しくなつて、さつきより声を上げて泣いたんだ。

誰かが僕の頭を撫でた気がする。

その手はとても暖かかったのを覚えている。

「これからも、仲良くしてやってくれ」

僕は必死で涙をぬぐつて答えた。

「うん……友達だもん」

部屋の中にはすでに僕以外に誰もいなかった。

夜の冷たい風が火照つた僕を冷やしていった。

また、今日も誰かが死んでゆく。

「……お互い……歳を取ったなあ……」

「そうだな……」

「……君に……会えて良かった……」

「時間だ」

「……君は……僕にとって……天使だった……」

「……俺もだ」

また今日も一人、天使が天使に命を奪われる。

t H e E n D

(後書き)

あなたも天使

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5376a/>

二人の天使

2010年11月25日09時21分発行